

微

睡

む



【 目次 】

1. 再会

2. 川を渡る

3. 金魚

4. めざめ

再会

その大樹は、長い長い歳月を超えてきた。

樹齢千年とも二千年とも言われるその長きに渡り、春が来るたびにうつくしく可憐な花をたくさんその身にまとい、数え切れない人々の目を楽しませてきた。

華やかに咲き誇るその花は「桜」と呼ばれ、人は皆それを愛してきた。

花々の下で笑い、泣き、愛をささやいてきた。大樹はそんな小さな者たちを見るのが好きだった。小さな命の営みをいとしく思っていた。そこには、自らが咲かせる花と同じ、儚いからこそ尊い何かがあった。

気の遠くなる繰り返しの末、大樹は自らの力が少しずつ弱まり、消えていくのを感じた。やがて、どんなに頑張っても花を咲かせることができない年があり、それは一年おきに、五年おきに、そして忘れた頃にと徐々に間隔が広がっていった。

しかし、大樹は決して命尽きたのではなかった。

思い出したように、それまでの枯れた様子が何かの間違いであるかのように、時にうつくしく咲き誇ってみせるその桜の樹に、いつしかある伝説がささやかれるようになった。

——その大樹の、咲き誇る桜の下で交わした約束は、必ず果たされる……と。

伝説を知った恋人たちは待ち望んだ。次の春こそはその花が咲くことを。

そして、隣にいる愛しい者とそれを見上げられることを。

それまで、変わらず傍にいられることを。

やがて、大樹は目を覚ます。

此度は少し長く眠ってしまったような気がする。

今年は……もうすぐやわらかな風が吹くこの春は、素晴らしい花を咲かせよう。

朧月夜が仄かなあかりを地上に投げかけるある夜、小さなつぼみが開く。

それは実に、十年ぶりのことだった。

少女と短刀の九十九神は、約束を交わした。

春の夜、甘い風に乗って薄桃色の花びらがひらひらと舞う中、その髪をなびかせ、そして顔を紅潮させ涙ぐんだ少女に、少年の姿をした九十九神は小指を差し出した。

「……泣かないでくれ、俺たちはきっとまた会えるさ、いや、きっとまた会おう——だから、どうか泣かんでくれ、あんたに泣かれると、心の臓がきしんでならねえんだ。なあ、だから笑ってくれ、頼む」

黒手袋に包まれた指先を改めて差し出しながら、薬研藤四郎は少女に懇願した。

少女は——本日をもって、主である審神者に代わって本丸を維持する「代理」の役目を解かれた少女は、とうとうその瞳から涙をこぼしながら、ふるえる小指をそっと差し出した。しかし、彼の願い通りに笑うことはできそうになかった。目の前の細い指をグッと力強く絡め取った薬研藤四郎は、紫の瞳をひたと目の前の相手にあて、強く約束の言葉を口にする。

「ずっとあんたのことは忘れない、いつか……またこの桜が咲いたなら、ここで会おう。花がほころんだ満月の夜、何があっても俺はここであんたを待ってる」

少女の目から、さらに粒が大きくなった涙がぼろぼろと落ちた。

「そんな、そんないつになるかわからない約束、待てないよ……。この桜が前に咲いたのはもう何十年も前、もしかしたら私が生きている間に咲くことなんて無いかもしれないのに。それにもし、もし咲いたとしても、花が散ってしまうまでの間に満月が来るかどうかなんてもっと——」

そして、言葉を切り、責めるように目の前の少年を見つめる。

「そんな遠まわしな言い方しなくても、もう会えないって言えばいいじゃない。どうしてそんな……残酷な言い方をするの、そんな風に言われたら、私、きっと待ってしまう。望みがないってわかってても、ずっと待ちやうに決まってるのに」

やさしい夜風が、そっと少女と少年の黒髪をいたずらにさらい、吹き抜けていった。薬研藤四郎は絡めた指はそのままに、少女の髪についた花びらを静かに取ってやる。そして、その後ろ頭に手を回すと、ぐっと自分に引き寄せた。

「なあ、俺はこう見えても九十九神だ。人とは違うあやかした。一度した約束はけして違えない。だから信じてくれ。あんたの言うように、俺のする約束はいつ果たせるかわからん頼りないものかもしれん。けどな、もし——もしそれが果たせるときが来たら、俺は絶対にあんたを二度と離さないと誓う……あんたがそう望んでくれるなら」

そして言葉を切り、うつむき加減で言葉を継ぐ。

「……だが今はダメだ。俺は大将のための刀だ、今ではあるかどうかかわからん刀身の代わりにあの御仁に人の身もらい、歴史を守るために敵と戦ってる——それは、あんたが一番よく知ってるよな。今すぐにあんたと添うわけにはいかねえんだ。だから、だから待っててくれ。いつか堂

々と迎えに行けるときを。忘れてくれても構わない、だが、もし、もし覚えていたならば、約束の場所まで来てくれ……俺のために」

それは、約束とも呼べないような淡い希望だった。

人にとってはあまりにも曖昧で不確かな、しかし刀にとってはいつまでだって待つことのできる、そんな不公平な取り決めで、少女と刀の九十九神は互いの未来を頼りなく縛った。

もしかしたら二度と会えないかもしれない予感を痛いほど肌を感じながら、いつかの再会を願って。

歩き去っていく少女を、薬研藤四郎は何か耐える表情でずっと見つめていた。その姿が小さくなり、やがて見えなくなっても、そこから動こうとせず、面影を追うように見つめ続けていた。

「……おい、聞いたかよ、あの桜、咲いたんだってな」

「ああ、うちのかかあがうるさく騒いでたわ、何だ、十年ぶりだって？」

市井に噂が走る。その年、ずっと花を咲かせずもう枯死したかと心配されていた大樹は、十年の歳月を経て可憐なつぼみをその枝いっぱいにつけ、やがて始まる春に向けて準備が整ったことを辺りに示した。そして今宵、満月の中、ゆるゆると薄桃色のつぼみが開き、ちらほらと白い花を咲かせたのである。

開花、満月。

かつて、まだ幼さの残る少女と約束を交わした時そのままの少年の姿をした九十九神は、主に外出の許可を願い出た。あれから、懸命に多くの審神者と刀剣男士が戦ってきたにもかかわらず、戦は未だ終わらない。しかし、薬研藤四郎はここに決めていた。約束のときがもし来たなら、どんなことがあっても会いに行こうと。そして、そのときこそ、もういとしい女を離さない。それは彼の主である審神者も知っていることだった。十年前、そのあまりにも頼りない約束を聞き胸を痛めたことを、審神者は鮮明に覚えていた。そして、その相手が自分の代わりとなり本丸を維持してくれた「代理」という役目の少女であることも。

また、長い付き合いである審神者には、薬研藤四郎が別れに際し本当は何を思っていたのかが手に取るように想像できた。薬研は、少女に「自分のことを忘れ、しあわせに生きて欲しい」と願っていたのだ。自分のような立ち位置の者とはでなく、普通の女として人の男と縁付き、平凡なしあわせを掴んで欲しいと。

しかし、初めての恋に訪れた初めての別れに胸をひどく痛めている少女へ、そう告げるのはあま

りに酷だった。だから、遠回しなやさしい別離を選んだのだ。いつか、と僅かな希望を残しながらも、時の流れに薄れていくような拙い約束をして。

そしてそれはそのまま、薬研自身の迷いでもあった。

いくら自制しても、冷静に考えようとも、彼のこころの内に住む少女の存在は彼を苦しめた。

——むしろ、離したくないのは俺の方だったな。女々しいったらないぜ。

かつてそう自嘲気味に語った薬研の顔を、審神者は今でも思い浮かべることができる。

それは悲しみに耐える男の顔だった。痛みをこらえ、愛する者のしあわせを守ろうとする、ひとりの男の顔だった。

愛するがゆえに力づくで恋人を振り切れない薬研は、約束を果たす日が来なければいいと願っていた。それが恋人の、愛する女の一番のしあわせであるのだと思おうとしていた。

しかし、時は来てしまった。

お膳立ては整った。もし、もし今でもかつての少女が約束を覚えているなら、薬研を忘れずにいるならば——

彼女が望むのであれば、薬研藤四郎の伴侶として本丸に受け入れる心積もりが主である審神者にはあった。それに見合うだけの忠義と働きを、薬研藤四郎はずっと自分に示し続けてくれたのだ。その恩に報いるためと思えば、たやすいことだと感じられた。

だから、どうか自分の忠実な懐刀が約束の者と会えるようにと、審神者はそう願わずにいられなかった。

薬研藤四郎は、大樹の下に立ち咲き始めた桜を見上げた。まだまばらな花、隙間を残す枝を透かして満ちた月が見える。それは煌々と明るく光を放ち、古く立派な樹に神秘的な陰影を与えていた。

甘い風が吹いている。まるであの夜のような、と薬研は思った。大粒の涙をこぼす少女と指を絡め、不確かな未来を夢みたあの夜。そして時は巡り、自分はここにいる。あの時から何ひとつ変わる事のない姿で、ここで、ここに立っている。

その瞬間は、あっけなく訪れた。

桜を見上げていた薬研の後ろに、誰かが立った。その気配に、剛毅で怖いものを知らないと言われた刀は涙ぐみそうになった。あれから十年、一日だって忘れたことのなかったいとし者の気配が、今まさに傍にある。彼の背はちりちりとした感覚に毛羽立ち、心臓は早鐘を打った。

「……薬研、本当に……本当に忘れずにいてくれたんだね、約束、守ってくれたんだね」

小さい声でかけられた言葉は、涙で湿りかすかにふるえていた。薬研は、深く息を吸い、覚悟を決めて振り返った。

——そこには、少女の面影をどこかに残しつつ、うつくしく成長したかつての恋人が立っていた

。今もいとしいその人は、昔よりも少し伸びた背丈で、笑んだまま涙を流して薬研を見つめていた。薬研の胸が切なさできりきりと痛み、いとしさで埋め尽くされ、やがて……その視線は彼女の背後に見え隠れするものに気づき、止まった。

くちびるがふるえるのを必死に抑え、薬研藤四郎は自らの刃生の中で一番の勇気を奮い立たせ、強まるばかりで今や彼を殺すのではないかと思われるほどの胸の痛みを耐え、いとしい女に向かって微笑んだ。

「……しあわせに、なったんだな」

かつての少女の後ろには、彼女の面影を色濃くうつした小さな女の子がおり、いつかの恋人のように薬研をつぶらな瞳で見つめていた。

「おめでとう、良かったな……、本当に、本当に良かった……なあ、ひとつだけ——俺に約束してくれ、」

これからもずっと、しあわせでいると。

かつての恋人と、その娘である少女が去った後、薬研藤四郎はひとり桜の下に佇み、風に揺れる小さな花たちを見つめていた。ふと、苦笑がその顔に浮かぶ。

——柄にもなく、もしかしたら、なんて思ってしまったんだ。人の子の一生がどんなに短いか、その時間がどれほど早く過ぎていくか、よく知っていた筈だったのにな。

でも、

「これでいいんだ、しあわせならば俺はそれで……」

十年の歳月は、刀にはあまりにも短すぎ、そして人にはあまりにも長かった。

すべてを許し見守るかのように光を投げかける満月の下、薬研はいつまでも桜を見上げていた。

Fin

川を渡る

——死にゆく妻のもとに、初めての恋を教えた相手が来たようだ。

僕と長の月日を共にしてきた妻は、今、死の床についている。

しかし、病ではない。目を閉じ、深く眠っているかのようなその表情はけして苦しみのそれではなく、白いものが多く混じるひとつにまとめ流された髪は、乱れもなく年齢がもたらしたやわらかさでくたりと身に添うている。胸の上に組まれた手は白く、かつてふっくらとかわいらしかった面影を残している。

その左薬指にはまった誓いのしるしをじっと見つめる。必要ないという妻に強く願ってつけてもらった、揃いの銀の輪を。

今朝早く彼女を診た医者が帰った後、僕はずっとこうして彼女のもとにいる。そう遠くない内に訪れるであろう、彼女の旅立ちを見送るために。僕たちに子はできなかった。そして、互いの両親や兄弟はもういない。

だから、見送るのは僕ひとりだ。

本当は彼女のもうひとつの家族と言うべき面々をここへ呼びたかったが、それはお上の許さぬこととて叶わなかった。けれど、人ならぬ彼らならばきっと、この場におらぬとも見送ることができるのではないか、もしくは妻は、身はここにあっても遠く離れた彼らに別れの挨拶を告げることができるのではないか、と僕は思っている。

その特別なえにしは、時も場所も越えて、互いを結び付けていると常々感じてきたからだ。

……そして、妻のころをずっと独り占めしてきた、あの者との絆も。

ふと、何かを思い出したように妻の目が開いた。

そのくちびるはうっすらと開かれ、ゆるゆると口角が上がってゆく。

やがて、もう力など残っていないだろう組まれた手がゆっくりと動き、何かを迎えるようにふわりと開かれた。

——ああ、「彼」が来たのだ。

そう悟った。

深く沈んだ意識は、ゆらゆらと乳白色の霧の中を漂っていた。

つらくもなく、悲しくもなく、かといって楽しさもなく、ただただぼうっと揺らめいていた。意識の持ち主である彼女は、自分の命のともしびが、そろそろ尽きようとしていることをわかっていていた。

ともすれば霧の中に溶けて消えてしまいそうな感覚の中、彼女は考え続ける。

.....寂しくないと言えは嘘になる。けれど、身内は先に見送ってしまい、残してゆく者は夫しかいない。その夫とて、死にゆく自分より年上であるのだから、ひとりきりの時間はそれほど長いものではない筈だ。

そして、正直なところ伴侶よりも気がかりだった自分の子供とも言うべき者たちは、信頼のおける若者に託した。

旅立つ準備は万端と言えた。

思考はゆらゆらと漂い、長いようにもあつという間だったようにも思える来し方を振り返る。

——彼女は、審神者であった。

正統な歴史を守り維持するための戦が始まってから、どのくらいの歳月が経ったものか.....もうわからなくなってしまった。

そのお役目についたのは、遠い遠い昔、まだ少女であった頃のこと。

人並みはずれた霊力を有する者たちを多く輩出する家に生まれ、ゆくゆくは立派にお役目を果たすのだと育てられ、世間のことを何も知らぬまま己のほかは人のおらぬ特殊な空間へと移り住み、そこで他者との関わりを、家族のあたたかさを、そして.....恋を、知った。

——薬研藤四郎。

鎌倉時代の刀工・粟田口吉光が打った短刀。切腹を試みた主の腹を断固として裂かなかったという逸話を持ち、主思いの刀として、多くの審神者より頼りにされ続ける存在。

彼女にとって薬研は、初めての鍛刀で自分のもとへ来てくれた刀であり、頼れる近侍であり、父や兄であり.....かけがえのない恋びとであった。

彼を通して、彼女は自分がなにものであるかを知った。

己が女であり、周りを取り巻く刀たち、つまり男とは決定的に違う成り立ちのものであることを知った。

そして、多くの男がいる中で特別な誰かだけにこころが揺れ胸が苦しくなること、その者の些細な言葉、何気ない仕草がどれだけ己を喜ばせ、悲しませるかということも。

彼女にとって、薬研藤四郎はきらめく恋そのものであり、せつなさと純情であり、ひいては彼女のこころのすべてであった。

いとしい者と共に過ごした、輝かしい日々。

彼女は若く、ただひたむきにときめきと憧れを追いかけた。しあわせな日々は、いつまでも終わることなく続くのだと信じて疑わなかった。つたない約束が果たされないことなど、考えも及ばなかった。

——この世には、どんなに願ってもどうしようもないことがあるのだと、人生はすべての者にひとしく残酷なのだ、まだ知らずにいた。

ある暑い夏の日。

彼女に初めての恋を教えた薬研藤四郎は、彼女を置いてひと振りだけで暗い道をくだっていった。

.....それからの長い長い歲月。

過ぎゆく時の中で、少女は大人になり、人の妻となり、やがて年老いた。

思い出の中の薬研藤四郎だけが、在りし日のままの姿で、変わらず胸にいた。

夫となった男は誠実でこころ優しく、彼女をときに退屈とも思える深い愛情でつつんだ。

そして更に月日が過ぎ去り、彼女のいのちはもうすぐ終わろうとしている。

思えば、いい人生だったのかもしれない。

そう彼女は思う。

いとしい者を亡くした後は、誰も欠けることなく戦い続けることができた。引退にあたっては、若い才にあふれ信頼のおける一族の若者に本丸と刀たちを託すことができた。

審神者としての自分を尊重し続けてくれたやさしい夫は、今も変わらずたいせつにしてくれている。

子供は持てなかったが、その代わりとして余りあるものをもらった。

やっぱり、いい人生だった。

彼女はもう一度、今度はしっかりとそう思った。

けれどその胸に、ちくりと痛む場所がある。こころのずっとずっと奥、誰も立ち入れない聖域とでも呼ぶべきところが疼き訴えている。

ひとつだけ、ただひとつだけ、こころ残りがあるとするならば——

彼女は今、いや、本当はこれまでずっと痛みを訴え続けていた場所に、そっと目を向ける。

そこには、ほっそりとした少年がしっかりと地に足をつけて立っている。そして、こちらを見つめている。そのうつくしい紫の瞳が細まり、まぶしそうな顔をした少年は、やがて、ふ、とやさしく微笑み手を振った。

これまでずっと、忘れた日などなかった姿、そしてその名前。

薬研……。

「——呼んだか、大将」

そのつぶやきは、胸の内だけに留めていた筈だった。誰にも聞こえない、声のないただの独り言であったのに。

彼女はうっすらと目を開けた。

視線の先には、懐かしくもいとしい者が立っていた。胸の奥心かくに大事に大事に住まわせていた姿そのままに、うつくしい少年が笑ってこちらへ手を差し出していた。黒い手袋に包まれた、彼女をいつだって連れ出してくれたその手。それにつかまり、幼さの残る少女はいくつもの新しい世界を見た。いくつもの、知らなかった気持ちを知った。

……最後に見たとき、いとしいその手は血に塗れ、庇った彼女の無事確かめたのちに力なく地に落ち、そして——。

そのときの、からだを四方八方から引き裂かれるような悲しみと苦しみを、彼女はまだまだありありと覚えていた。

しかし、目の前にいる初恋の相手は、在りし日そのままの姿で、いつだって忘れたことのない笑い方で、手をさしのべていた。

「迎えに来たぜ、たいしょ……ああ、思った通り、齢を重ねてもかわいらしいな——もうこの世への暇乞いは済んだか？ うん、そうか……なら行こうぜ、俺のお姫さん」

彼女は残り少ないちからを振り絞り、いとしい相手へ腕をさしのべてそれに応えた。

そのくちびるには、微笑がたたえられていた。

——眼前には、巨大な川が横たわっていた。

あまりに川幅が広いために、向こう岸は霞んでわからない。恐らく「川だ」と前もって知っていなかったなら、そうだと認識できなかったに違いない。それほどあり得ない巨大さだった。流れが場所によって異なるらしいその川面は、あるところでは穏やかに、またあるところでは激しくしぶきを上げ、渦を巻いているかのように見える。

言葉を失くし見つめる私の手を、きゅ、と薬研が握り直す。その横顔に浮かぶ表情は引き締まっており、ふっと昔を思い出しせつなくなった。

生をまっとうし現し身を捨てた私は、いつの間にか年若い——それこそ、薬研と出会ったばかりの頃くらいの——姿へと戻っている。人は死ぬと人生でもっとも輝いていたときの姿を取るのだ、と遙か昔に何かで読んだことがあるけれど、それは事実だったのだと面白くも不思議にも思う。

今こうして手をつないでいる私たちは、まるであの頃に戻ったかのようで、けれどもう決して在りし日に戻ることはできない。

「……うん、俺も初めて見たが、これは大層なもんだな」

感嘆した口調で薬研がそうつぶやく。そして、私の顔を覗き込み、

「どうした大将、不安か？ 何、俺がきちんと渡してやるさ、心配すんな。大船に乗ったつもりで……というにはちいとばかし背丈が頼りないかもしれんが、任せてくれていいぜ」

そう言って落ち着かせるように頭をなでた。彼は、いつだって、そんな風に弱気になる私を安心させてくれたものだった。それがあまりにも昔と変わらないので、年を取り涙もろくなってしまった私は、こらえきれずにうつむいてしまった。

「なんだ、泣くほど怖いのか？ そんなに俺は頼りにならないか——まあ、確かに、大事な女をおいてポッキリいっちゃった刀が言うことじゃ安心できないかもしれねえが……何が来ても大将を守るって心意気は変わっちゃいないんだがなあ」

「違うよ……！ そんなじゃない。私は薬研のことを一度だってそんな風に思ったことなんてない。最初に会ったときから——もちろん今だって。ただ……ただ、すごく懐かしかっただけなの。あまりにも薬研が変わらないから、うれしかったの」

やっぱり昔と変わらぬ仕草で、薬研が私の涙をぬぐった。それから軽く抱きしめ、ありがとな、大将、と言った。それは彼に似合わぬ、川音に紛れそうな、小さな声だった。

「じゃ、行くか。しっかりつかまってくれな」

私を背におぶった薬研は、ひとかけの迷いもない様子で川へと足を踏み入れる。そこは流れが緩やかで水嵩もそれほどない箇所であったが、行き先すら霞んで見えぬ距離を人ひとりを背負って

渡るのは、彼の体力、腕力をもってしても十分に過酷だと思われた。

「や、薬研……やっぱり私」

「いいんだ、大将」

薬研がきっぱりとした口調で、私が言いかけた言葉を遮った。

「この川を渡してやるために、ずっと待ってたんだ。何、気にすることはないさ、昔っからここは『初めての男』が渡してやるもんだって決まってるんだからな……だから、俺はずっと待ってた。大将にまた会えると思えば、なんてことなかったぜ」

いくら浅瀬とはいえ、途方もなく広い川だ。進むごとに深さが少しずつ増してゆき、それにつれて薬研の下半身が沈んでゆく。流れは他に比べてゆるやかであるが、私が流されぬようしっかりと引き寄せながら水の抵抗を受けて進むのは、難儀でない筈がなかった。

そして、それにも増して私を苦しくさせたのは、薬研が折れたのちも本霊に戻らず、私をずっと待っていてくれたことだった。

刀剣男士たちは、親とも呼べる大もとの存在——政府が「本霊」と呼ぶそれから枝分かれした存在だ。「分霊」と呼ばれる彼らは、折れた際にすべての記憶を捨てて大いなる存在である本霊へと還る。そして、次の召喚に応じるまでの間、眠りにつくのだ。

もし還らずに留まった場合、存在が希薄となり力なきあやかしとして彷徨うことになる。また、何らかの想いに縛られている場合は、九十九神以外の卑しいものに転じることもある。どちらにせよ、誇り高い彼らにとって望ましいことではない。

そんなことを、薬研に……たいせつな愛するものに強いてしまったという事実は、私を強く打ちのめした。命を代償に守ってもらった拳句、その後までも縛ってしまっていたなんて。

ごめんなさい、薬研、ごめん、ごめんなさい……と許しを乞うふるえる声に、薬研は静かに首を振った。その表情は背からは見えない。けれど私には、彼がどんな顔をしているかがわかる気がした。

「なあ大将、俺はな、そんなことはどうでもよかったんだ。たとえこの身がわけのわからんものへと変じても、どんな責め苦に遭おうとも、大将にまた会えるのなら、そんなことはどうでもよかった……だから泣くな。せっかくこうして会えたってのに、背で泣かれちゃいくらなんでもせつないからな。それに、この状況じゃ抱いてやることも涙をぬぐってやることもかなわん」
徐々に水の深さが増し、もうぎぶぎぶと水面を割る音は聞こえない。ただ、私のすすり泣く声だけが辺りに響いている。生きる者とそうでない者を分かつこの川を渡る者はとてもたくさんいる。しかし、あまりにも広く大きいここでは、誰と行き会うこともない。まるで世界に私と彼しかいないみたいだ、と感じた。泣き止まない私に、薬研が苦笑いをする。

「相も変わらず泣き虫だな、そんなことじゃ、さぞかし周りのやつらを困らせたんだろうな」

「そんなことない！　しっかり頑張ってたんだから。泣かないように、心配かけないように……薬研に安心してもらえるように……」

言葉が途切れ、ちゃぶちゃぶと小さいしぶきの上がる音がやけに耳につく。水はもう彼の胸辺り

まできており、薬研はしっかりと私を抱え直し、言葉を継いだ。

「——大将の最初の男になれたのは、俺にとってこれ以上ない誉れだ……もっとも、その呼び名は俺だけのもんだと、はなッから思っていたからな、実際にそうなれたときは、そりゃあ嬉しかったんだ。だが、まさか雅もわからん俺が、こんなにもせつない気持ちになる瞬間がくるなんて、当時は思ってもみなかった……先のことは、わからんもんだな」

そう言って、薬研は寂しそうに小さく笑った。

「なあ大将、そんなに悲しまないでくれ。いつもみたいに笑ってくれ。やっとうこうして会えたんだ、何か楽しい話でもしようや。あいにく俺にはあまり持ち合わせがないから、大将の話が聞きたいな」

水位はどんどん上がり、やがて薬研の上半身がほぼ沈んだ。

それでも彼は私を離さないし、私も彼から離れない。そのほっそりとした、けれど、どんなときだって私を庇い守ってきた背に身をあずけ、その冷えて失われていくぬくもりを留めようと体温を分け与える。残酷なくらいに大きい川を渡るには、きっとまだまだ時間がかかる。こうして身を寄せて語り合える時間も、まだ。

だから、私たちはたくさんたくさん話をしよう。

会えなかった長い歳月を埋めるために、楽しいことばかりを。

そして……どれだけ愛しているかを伝えたい。一日たりとも忘れたことはなかったと。

その川は大きく、まだ向こう岸は見えない。

けれど、いつかは辿り着く。いずれ必ず。

そうしたら私たちはどうなるの。この先も一緒にいられるの。

きっと訊ねても彼は語らない。

だから私は、今このときだけは泣かないで、彼の望むように笑っていよう。

楽しそうに、うれしそうに、ただ笑っていよう。

——たとえこの先に、胸が張り裂け、涙が乾かぬときが待っていたとしても。

もう目を開けることのない、冷たい妻の手をそっと握った。

この世のしがらみをすべて置いて自由の身となったその顔は、うっすらと微笑んでいるように見える。

僕は、そっと別れを彼女にささやく。

もうきっと届かない、はなむけの言葉を。

——君の愛が、僕にないことは知っていたよ。

それでも、そんな君を愛していた。そうすることしか、僕にしてやれることはなかったから。

きっともう君は、愛する彼の手を取りしあわせそうに笑っているのだろう。頬を染めてはにかむ、あの笑い方で。

そして僕は、名残惜しい思いを振り切って握った手を離し、その薬指にはまる契約の証を外してやる。

つけられていたときは存在感のあったそれは、外された今は頼りなげで寂しそうに見えた。ぐっと握りしめれば、そんな筈はないのに、ぬくもりが残っている気がした。

——さようなら、いとしい人。長い間、僕の妻でいてくれてありがとう。

こう言うのが適切かどうかはわからない。けれど、君たちの行く末に幸多からんことを切に祈る。

そして、これからも僕は、ずっと君を想っているよ。

たとえ、そのところが他の誰かのもだとしても、君は世界でただひとりの、僕が恋した人だから。

愛する君よ、どうか……安らかに。

fin

嫁いで半年の審神者の妻は、いまだ処女である。

それは本丸中の者が知っていることであった。

なぜなら、当の夫が常々それを下卑た話題として口にしていたし、彼によそに困う女がいることもまた、周知の事実であったからだ。

手付かずの無垢な妻は、まるで気に入られなかった人形のように打ち捨てられて日々を送っていた。

彼女の夫にとってこの婚姻は降って湧いた災難そのもの、避けられないわざわい以外の何物でもなく、その鬱憤はやってきた花嫁に向けられた。哀れな彼女は、何をしてもないのに、夫となった男にこれまでまともに口をきいてもらえたことすらなかった。

それでも、世間も男女の機微も知らぬ妻は、自分が至らないせいであろうと必死に努力した。

当番の刀たちに必死に頼み込んで厨仕事を教わったり、率先して広大な屋敷の掃除に勤めたり、時には力仕事を手伝おうとして止められたりしていた。

妻はからだが弱いたちで、その顔色は雪のように白くよく周りに気遣われた。血の気のない頬などはまるで凍えた人間のようで、彼女の夫には「屍を嫁にした心持ちだ」と陰口を叩かれていた。また、からだつきもろくに肉がついておらず、化粧をしなければまるで童のように見えた。

実の夫にまるで下女のような扱いをされても、妻は泣かなかった。その黒目がちな目を悲しそうに伏せるだけで、涙はこぼすことはなかった。その様も夫は気に障るらしく「可愛げのかけらもないやつだ」と罵るのだった。

気のやさしい周りの刀たちは、そんな妻を哀れんでいた。

そもそも、ここへ嫁いだのは彼女の意思ではない。ただ家の決めたことに逆らえなかつただけであり、そこに彼女の意思が入る余地もなかった。避けられないわざわいであったのは彼女も同じことであるのに、理不尽な仕打ちを受けつらい日々を送るその身の上に、こころ優しい九十九神たちは同情を寄せずにはいられなかった。

娘は、もともとは審神者のたまごであった。娘の実家は、正統な歴史を守るための戦で勢力を増した家であり、多くの優秀な審神者を輩出することで知られていた。彼女も例に漏れず、その一族に連なる者として幼い頃より修行を積み、長じてからは審神者である父のもとに見習いとして身を寄せていた。

しかし、彼女は才はあったが病弱であった。霊力というものは生命力に多大な影響を受ける。このまま審神者になったならば、必ずや短命で終わるであろうと危惧した父は、良かれと思って娘の縁談を取りまとめ、嫁がせたのであった。

そのようなわけで、親の愛情を承知しているが故に何があろうとも離縁を言い出せない妻と、しがらみと打算から婚姻をご破算にするなど考えられない夫は、名ばかりの夫婦として暮らし、世

間体を保っているのがあった。

ある夜更け、妻は足音を忍ばせて廊下を急ぎ渡っていた。

もう遅い時間とて、酒を呑みにぎやかに騒いでいた連中も既におらず、辺りは虫の声が聞こえるばかり、ただ妻の小さな足音だけが規則的に響いていく。彼女は寝入る段になって、後で済ませようと思い忘れていた雑用を思い出し、あわてて部屋を飛び出してきたのであった。

やがて、ある曲がり角に差し掛かると、妻はこころなしか緊張した表情を浮かべた。

「旦那さまがお急ぎだと仰っていたから、何があっても今夜中に終わらせなくては……」

小さな声でぽつりとつぶやくと、ひとつ息を吸い込み、決意した表情で廊下の先へと足を進める

。

その先は刀たちの居室が集まっている棟であった。日が暮れてからそこへ行くことは以前より固く禁じられていたが、通らねば用事を済ませることはできない。

さいわい、皆はもう寝静まっているようだ、静かに通り過ぎれば問題はないだろう……そう考え、足を速めたときだった。

「……へえ、『奥さま』じゃねえか、こんな夜更けにここいらをうろうろするのは感心しねえなあ。旦那は何も言わないのか？」

不意にかけられた声に、妻は見てはつきりわかるくらいにびくりと身をすくませた。まさか起きている者がいるとはという驚きと、見つかってしまったという焦りで彼女のからだは小刻みにふるえた。

おそろおそろ声のした方へ目をやり、次の瞬間、妻は口を手で覆い息をのんだ。

「——その怪我はどうされたのですか！」

妻は裸足のまま庭へと降り立つと、声の持ち主へ駆け寄った。その行動は相手の予想を裏切るものだったらしく、地面に座り込んだ姿勢のまま、目を見開いて近づいてくる妻を見つめていた。

「……ああ、なんてこと……早く手入れしなければ。まだ手入れ部屋は埋まっているのですか？」

今日の夜戦は厳しいものだったのですね」

汚れるのも構わず、しゃがみこんで傷の具合を調べながらそう問うた妻に、血を流した刀はふ、と片側の口角を上げ、自嘲的な笑みをもらした。

「いや？ 手入れ部屋ならどこも空いてる筈だぜ。まあ、俺は——違うな、『俺ら』は、その恩恵には与れないだけって話だ」

今度は、妻が目を見開く番だった。

「どういうことですか？ どうしてこんなに傷ついているのに、手入れが行われないのですか？」

あ、もしかして明日は非番なのですか、だとしても、手入れはその日のうちに済ませた方がいいのですよ、傷が痛んでは眠りも浅いでしょ」

さ、行きましょう、と妻は黒い手袋に包まれた手を取ろうとした。が、それは素早く引っ込められ、彼女の手は空を切った。

「……必要ない、俺に構わんでくれ。それがあんたの身のためだ、知らなくていいってことはあるだろうからな——さあ、さっさと旦那の待つ閨に戻りな」

そう言って背を向けたほっそりとした後姿に、小さな声がつぶやいた。

「——旦那さまは、今宵は『奥方さま』のお邸に行かれて、お留守です」

その言葉に、くるりと刀が向き直った。

「奥方さま？ それはあんたのことじゃないのか、審神者はあんたの旦那だろう」

「ええ、確かに私はあの方の名目上の『妻』です。けれど、ここで『奥方さま』と呼ばれるのは私ではありません……旦那さまとその方は、私がここへ来るずっと前から愛し合っておられ、固いえにしで結ばれていらっしゃるのです、私はただの義理でこちらにお世話になることになっただけで……元から、奥方さまとは立場がまったく違うのです」

結局、妻の用事はその夜に済ませることができなかった。

なぜなら、それにあてる筈の時間は、傷ついた短刀・薬研藤四郎の手入れと、彼との会話で費やされてしまったからだ。

薬研藤四郎は、顕現させられてまだそれほど経っていないのだ、と語った。妻はそれで先ほどの会話がかみ合わなかったことに合点がいった。まだこの本丸のことをよく知らない彼は、自分や夫のことを聞き及んでいなかったのだ。彼女が身の上を話すと、薬研はたいそう驚き、憤った。

「……それじゃまるで、鉢に飼われる金魚みたいなもんじゃねえか、勝手な都合で自由を奪われ、ただ生かされている」

「——いいえ、私は金魚のような華やかなものではありません。その愛らしさで目を楽ませることも、こころを癒すこともできぬ、地味でみすぼらしいただの雑魚です。だから旦那様にも愛されない……金魚とは、『奥方さま』にこそふさわしい呼び名です」

「……あんた、それでいいのか、人の一生なんてただでさえあっという間に終わっちゃうのに、そんな男のためにあたら女のいいときを無為に過ごして」

その問いに、妻はあいまいな笑顔で、ただ首を振った。

「私にはわかりません……けれど、他にゆくところも帰るところも、もう私にはないのです、だから、こうして住まわせていただけるだけで、生きていけるだけで、感謝すべきなのだと思っています」

いざ手入れをする段になって、妻はあまたある薬研の傷が、昨日今日できたものだけではないことに気づいた。そして、肉体を持ってから今まで一度たりとも傷を癒されたことがないという話を聞き、大きな衝撃を受けた。

彼女の夫であるこの本丸の審神者は、手に入りやすい刀を使い捨てにする男だった。手入れを惜しみ、酷使して折れれば、蔵に無造作に放り込まれた鍛刀や戦場で得た刀を顕現させ、また同じ

ことを繰り返していた。彼にとって希少な刀以外は「消耗品」なのであった。いくら元は刀であっても、自分と同じ肉の器を得たからには痛みも苦しみもある、その事実を平気で無視できる冷酷な男であった。

妻は愕然とした。彼女の父は善良な審神者であった。いつも、純真な忠誠心を持つ刀の九十九神を愚かな人の子の争いに巻き込んだことを、深く恥じていた。彼らを敬い、愛していた。そして、娘である彼女はその考えに共感し、自らもそうあろうと思ってきたのだ。

彼女は申し訳なさに涙を落としながら、薬研藤四郎を癒した。その手つきは母のようなやさしさに満ちていた。彼女に身を任せた彼は、静かに目を閉じていた。そして、身のうちに流れるあたたかいものを感じていた。

手入れが終わり、妻は他の傷ついた刀たちをも癒したいと願ったが、薬研は静かに「手入れが必要な者は、もういないんだ」と答えた。

激しく泣いて詫びる妻に薬研は、なんであんたが謝るんだ、ひどい扱いを受けてるのはそっちだって同じだ、言わば、俺たちは仲間じゃねえか、と男らしく笑った。

——それが、彼らが出会った夜の顛末であった。

妻が独断で薬研藤四郎の手入れを行なったことは、翌朝には本丸中の刀が知るところとなった。しかし、それを審神者に伝えるものはもちろんいなかった。それからというもの、妻は夫が外泊する夜を選んで、手入れを施されない刀たちを癒すようになった。彼女の手入れは丁寧で愛情のこもったもので、癒された刀たちは皆こころから彼女に感謝をしたし、彼らの兄弟刀やゆかりのある刀たちもまた、そのやさしさをありがたく好ましいものとしてみた。

だから、妻と薬研藤四郎がいつしか少しずつ互いの間にある距離を縮め、やがてそれがぎこちない初恋へと変わっていったことに対しても、一様に沈黙を守り、ときにはそっと協力をし彼らの恋路を助けた。

不器用な恋びとたちの始まりは、虐げられている者同士の連帯感と同情だったかもしれない。けれど今となっては、それは確かな恋へと育っていた。

もう彼らはひとりぼっちではなかった。

たとえ不義の恋であっても、純粋な気持ちは互いを強くし、成長させていった。そして、そのしあわせは、周囲があたたかく見守る中で、密やかにずっと続くかと思われた。

しかし、その平穏は突然に終わりを告げた。

ある日の夕方、外出から戻った審神者は前口上も何もなく、いきなり妻を平手でしたたかに打ち据えた。

予定にない政府からの徴収に出かけ、戻った矢先のことだった。

ただでさえ童のように頼りない妻は打たれた勢いで床に倒れ、理由も問えずに怯えた目で自分の夫を見上げた。

その暴挙に近侍の刀はあわてて審神者を止めにかかり、やがて騒ぎを聞きつけた刀たちが集まってきた。

「……ある時期から急に資材の減りが激しくなった、と上から身に覚えのないお訊ねがあったから、どういうことかと思えば——随分とまめに刀の面倒をみてくれたようだな」

ふるえるばかりで言葉を返さない妻に、苛立った言葉が更に続けられる。

「誰が勝手なことをしていいと言った、名門の出だからと凶に乗ったか、何を考えているのかわからないような顔でしおらしく振る舞っているながら、腹の中では俺を見下し馬鹿にしていたんだろう」

夫から憎憎しげに投げつけられた言葉に、妻は目を見開き激しく首を振った。

「そんな……！ 私はそんなこと、思ったことも——」

「いいか！ ここの主は俺だ！ 今後いっさい勝手な真似は許さん！ お前らも、こいつに肩入れするのなら、それなりの覚悟をすることだ。俺に盾つく刀はいらん、代わりなどいくらでも手に入る、わかったか！」

それは妻だけでなく、周囲の刀たちにも向けられた言葉であった。皆が怒りを押し殺しうつむ

く中、人垣をかき分けてやってきた刀がいた。薬研藤四郎だった。

「……！ どうした、大丈夫か！」

周りが止める間もなかった。

傷ついた恋人を見るなり、薬研は急いで心配そうに駆け寄った。「薬研！」とどこからか彼の兄の声がした。

「ほう……こいつをそそのかしたのはお前か、どこにでもいる、いくらでも代わりのいる、使い捨ての刀の分際で、主の嫁に手を出すとは随分と度胸のあることだな」

頭上から聞こえた不穏なその言葉で、薬研はやっと大事な女を傷つけた者がそばにいたことに気がついた。恋人を大事そうに抱きかかえたまま、剛毅な短刀は己の主へと言い放った。

「はっ、何が嫁だ、よそにおんな囲って日をおかず通い詰めてる野郎がよく言うぜ、拳句、てめえのことを棚に上げて手を上げるなんざあ、男の風上にも置けねえってのはあんたのことだぜ、恥を知りな」

よどみないその言葉に、夫の顔が怒りで真っ赤になった。それを見て妻が薬研の腕から逃げ出し、彼を背に庇って両手を広げた。

「彼は悪くありません、すべて私が勝手にしたことです！ 全部、私が無理にしただけなんです、罰なら私が受けます、何でもします、だから、みんなを責めないでください……ひどいことしないで……お願いします！」

泣きながらそう懇願する妻を見た夫は、いやらしく顔を歪めて笑った。

「そうか、何でもする、か……しばらく放っておいた間に、随分と女らしくなったことだ。大方、どこかのつまらん刀でも啜え込んだらろうが——わかった、他ならぬお前の頼みだ、聞いてやろう」

「……！ 本当ですか！ 旦那さま、ありがとうございます」

「刀解しろ」

「え……？」

夫はうれしそうにいやらしい笑みを浮かべ、もう一度はっきりと言い渡した。

「聞こえなかったか？ 刀解しろ、と言ったんだ。お前の手で、その薬研藤四郎を刀解しろ。そうすれば許してやる……なんなら、今後も手入れを続行させてやってもいいぞ。どうだ、俺は寛大な夫だろう」

場がしん、と静まり返った。

周囲の者たちの息遣いまで聞こえるような、いやな沈黙だった。

そこに薬研以外の短刀がいなかったのは、不幸中のさいわいであった。もし彼らがこの場にいたならば、中には泣き出してしまおう者がいたかもしれない。しかし、短刀たちはみな傷つき果てて部屋に横たわったまま動けなかったのも、このおぞましい場面を見ずに済んだのであった。

「なにを……仰っているのです？ 今ご自分がなにを——」

呆然とつぶやいた妻に、夫は結婚以来はじめてのやさしい笑顔を向けたが、その目はけして笑っていないかった。

「ああわかっているとも、俺は、俺に従うものしかいない、とそう言ったんだ。お前やお前の父親のような、ご大層な家柄の審神者さまとは違うんでね……どんな姿を取ろうが、肉体とこころを備えようが、物は物でしかない。こいつらはな、ただの鉄くれなんだよ、人と並び立とうなど、思い上がりも甚だしい」

「——嫌です」

「……何だって？」

最初は小さくつぶやいた妻は、今度は夫を強い視線で見据え、強い口調で再度、言葉を紡いだ。

「嫌ですと申しあげました。旦那さま、あなたは間違っています、彼らは——刀の九十九神は、自分たちに何の得もないにもかかわらず、愚かな私たち人の子のために命を賭けて戦ってくださっているのです。それをそのように侮辱するなんて……一時は審神者を志した身として、そして同じ人として、私は恥ずかしい。旦那さま、どうか二度とそのようなことを仰らないでください、どうか失望させないで……」

妻の必死の訴えを聞き終えた夫は、何の表情も浮かべぬ顔で、傍にいた刀へ「薬研藤四郎を抑えろ」と命じた。そして、ためらいすぐに動かなかったその体を、持っていた杖でしたたか打ち据えた。

「やめてください！」

悲痛な叫び声を上げ、妻が夫のからだに取りすがった。しかし貧相なその身では到底かなわず、振り払われてまたも地面へと這いつくばった。

「やめろ！ 離せ、頼む、離してくれ！」

今度は薬研藤四郎の罵声が飛んだが、その身は仲間に羽交い絞めにされて動けない。

妻は地面に伏しながら、黒目がちな瞳に明確な怒りを宿し、「恥を知りなさい！」と叫んだ。夫は妻に近づきしゃがむと、頬を乱暴につかみ上向かせながら鳥肌の立つような猫なで声で、ひと言ずつ区切って言い聞かせた。

「いいか、明日までに、薬研藤四郎を刀解しろ、それができないときは、やつの兄弟をひと振りずつ、お前の目の前で折る、わかったか？ ……ちゃんとうまくできたら、ご褒美だ、抱いてやる」

そして立ち去り際に、「翌朝までだ」と念を押して立ち去った。

夜の闇を切り裂くように、閃光がひらめいた。間をおかず、腹に響く大きな音がとどろく。それはざあざあと激しく降る雨の音と相まって、暗い中をひたすら急ぐ恋仲の男女とその行き先を隠すかのようだ。

薬研藤四郎と審神者の妻であった女は、手に手を取り合い、雷雨に紛れて本丸を抜け出した。それは、もう戻ることのない、これまでの日々との永遠の決別であった。女は薬研を連れて父親の元へ戻りたいと言ったが、薬研はそれに頷かなかった。戻るなら自分は置いていけ、その方が絶対がいい、と譲らなかった。ならば共に逃げて、あなたと離れ離れになるなんて死ぬよりつらいから、とかき口説いたのは女の方だった。

足の弱い女を背に負い、強い雨に打たれながら走る薬研の姿は、暗がりにひたすら巣穴を目指す獣に似て、その紫の目は爛々と光り見えぬ先を睨んでいた。

これからのことなど、何もわからない。何のあてがあるわけでもなく、そもそも主人を捨てた刀剣男士に待ち受けているものがどのような運命なのかすら知らないのだ。しかし、不義を働き逃げた男女の末路は知っている。遙か昔から、許されぬふたりの道行きは不幸な結末で終わると相場が決まっている。

だが、薬研は愛する女をそんな目には遭わせるつもりは更々なかった。この哀れなしがらみに囚われた恋人を、自由にしてやりたかった。こころから笑える、そんな日々を取り戻してやりたかった。そして更に願うことが許されるのであれば、その隣にいたかった。——ただ、一緒にいたかったのだ。

けれど、ひとたび契約を交わした以上、己の主を裏切ることには決して許されぬ重い罪だ。恐らくすぐに追っ手が放たれ、それはこちらの死を確認しない限り、地の果てまででも追い詰めて罰を下そうとするだろう。

.....もし自分が捕まるようなことがあったなら、このいとしい者はどうになってしまうのか。そう思えば、左胸の辺りがひどく痛んだ。

何よりも大事な、誰よりもしあわせになって欲しい女は今、自分の背にからだを預けて、冷たく痛い雨に打たれている。本当ならば優秀な血筋だ、恵まれた環境でしあわせに過ごすことができただろうものを。

——俺は、今からでも彼女を元いた場所へ戻すべきなのではないか、そして、あの鬼畜の望むがままに刀解された方がいいのではないか。

迷いに、今にも足が止まりそうになる。

——自分ひとりの犠牲で皆が助かり、愛する者が無事にいられるのであれば、それがもっともい

いやり方なのではないか。

しかし、薬研は湧き起こる弱気を雨と共に振り払った。

勝手なのは承知している、この世でもっとも大事な女を不幸にしてしまうかもしれないことも。すべて、俺のせいだ。

でも、それでも、どうしても離れられないと思う。

この何を犠牲にしても惜しくない一等たいせつな女が、たとえ人の理においては夫であっても、他の男に抱かれるなど耐えられる筈がない。よしんば父親の元へ送り届けたとして、まだ若い娘だ、新たな縁談が持ち上がることは容易に想像できる。

そんなことになるくらいであれば、相手を殺め、人殺しの狂った刀として破壊される方がずっとずっとマシだ。

迷いは限りなく、辺りを包む暗闇、そして荒れ狂う空は、そのまま薬研のこころを代弁しているかのようだ。

だが、今はそれよりも雨風をしのげる場所を探し、冷え切った恋人をあたためることだ。からだの弱い彼女は、この雨にかなり消耗しているに違いない。薬研は辺りを注意深く探りつつ、足を速めた。

「じゃあ、ここでじっとしててな、間違っても俺を探そうと勝手に外へ出てくれるなよ」

そう幾度も言い聞かせる薬研に、女は心細そうにうつむき答えない。

運よく見つけた古ぼけた蔵に恋人をおき、夜が明けるまで番をするために外へ行こうとする薬研を、彼女は悲しそうに引き止め、離れないで欲しいと訴えた。

しかし、いつ追っ手が来て囲まれるかもしれない状況下で一緒にいては、いざというときに足手まといになり思うように戦えない。また、彼女だけを逃がしたくともかなわない。そう言い聞かせても珍しく素直に頷かない恋人に、薬研はこころを込めて同じ話を繰り返し、朝まで我慢するようにと諭した。

だが、彼女もまた頑なだった。行くのならば自分も共に、と言ってきかない。外はいまだ激しい雨が降り、時おり稲光が蔵の中まで明るく照らすひどい有様だ。薬研は、まるで幼子のように聞き分けのない恋人に困りながらもいとしく思い、ふたりきりのときにだけ使うと決めている名でそっと呼び、やわらかく抱きしめた。

「……金魚、頼む、聞き分けてくれ。夜が明けたら、いくらでも傍にいてやる、だから、今夜だけはこらえてくれ」

しかし、それでも恋人は泣いてひたすら行かないでくれとすがってくる。その様がいじらしく、またあまりに怯えているのも哀れで、薬研はしばらくそのからだを抱きしめ、あやしてやった。

やがて、深く眠った恋人のむき出しの肩を着物でくるみ、更に自分の上着をかけてやった薬研は、そっと身を起こして自らの本体である短刀を手に外へ出た。

雨脚はまったく衰えておらず、ざあざあと響くその音に、薬研は先ほど見た恋人の白い肌を思い出した。いつも血の気を感じさせないその肌がほんのりと朱に染まったときも、同じように雨の音が響いていた。自分はこの先、激しい雨が降るたびに今夜のことを思い出すだろう、と彼はせつなくなった。そして、甘い感傷を振り払うように、降りしきる中へと一歩、踏み出した。

——長い長い夜が明けた。

焦がれていた最初の光が差したのに気づき、薬研はようやく安堵の息をついた。と同時に、ひとり残してきた恋人が心細さに泣いているのではないかと気が急ぎ、戻る足を速めた。

結局、夜が明けるまでに追っ手らしき者を見かけることはなく、肩透かしを食らったような心持ちであった。自分たちが逃げ出すことはきっと想定の中で、姿を消すと同時に追われるであろうと覚悟をして出てきたのだが、どうやら杞憂に終わったようだ。

もしかしたらあの男は、それほど妻への執着を持っていなかったのかもしれない、などと楽観的なことを考えながら蔵の扉を開いた薬研は、そのまま次の一歩を踏み出すことができなかった。

そこには、血に塗れ、無残な姿となった恋人が、まるで物のように転がっていた。

叫びだしたいのに、口から漏れるのは意味のないうめき声だけで、駆け寄りたいたのに、その足はがくがくとふるえて役に立たない。これまでどんな局面でも、たとえそれが死を覚悟するような危険な場面であっても、これほど恐怖を覚えたことはなかった。これほど打ちのめされたことはなかった。

不意に、薬研の脳裏に、昨晚の恋人の白い肌が浮かんだ。あのとき、ほんのりと朱に染まっていたそれは、今は蠟のように白く、乾いた血が彩りを添えて、生きる者を拒絶するような壮絶なうつくしさをかもし出していた。

やわらかい白い肌を思い浮かべたことで、ようやく薬研は足を動かすことが出来た。一歩、そしてまた一歩、夢の中にいるかのようにゆっくりと歩み寄る。空気は重くねっとりと身にまとわりつき、まるで水の中を進んでいるかのようだ。

恋人の元へと辿り着いたときには、全身がびしょりと汗で濡れていた。がくがくとわななく手をそっと差しのべその頬へとふれれば、そこはもういのちのぬくもりが抜け落ちて、どこまでも冷たかった。顔にかかった乱れた髪を苦労してかきやれば、首筋に幾筋もの痛々しい傷が開いており、彼女の全身を彩った血はそこから吹き出たものであることがわかった。そして、禍々しい……人ではないものの気配がうっすらと残っていた。

「そうか……従わないものはいない、とあの男は言っていたな」

ぽつりとそうつぶやけば、そう高らかに言い放ったときの醜い顔が脳裏に膨れ上がった。そのままそれは外へ飛び出て、空間を埋め尽くす。そんな妄想に囚われた薬研は、無意識に抜刀して

いた。そのまま、虚空を闇雲に斬りつける。そんなことをしても愛する者のいのちは戻らず、また殺めた者も既にもいないというのに、どうしても衝動を抑えることができなかった。

「殺す……殺してやる……どうか死なせてくれと懇願するくらいの陰惨なやり方で、散々に捌って苦しめて殺してやる……」

目が眩むような強い憎しみに、口から呪詛がもれる。しかしそれは徐々に勢いをなくし、やがてその手からは音を立てて刀が落ちた。

「すまん……あんなに離れないでくれと言っていたのに……俺を、こんな俺だけを頼りに、すべてを捨ててついてきたのに、そんな女を俺は、こんな寂しいところでひとりで逝かせちゃった……許してくれ……やっぱり鉢の外に出したのが間違いだったのか、連れて逃げなければ死なずに済んだのか」

だが俺は……それでも、あんに、広い世界を、うつくしい景色を、見せてやりたかったんだ。そして、目を輝かせて喜ぶさまを、隣でずっと見ていたかった。ただ……それだけだったのに。

くずおれ、ついた手と手の間に、雨ではない珠のようなしずくが落ちる。それは次々に滴っては、薄暗い蔵の床にしみこんでいく。外では今も激しい雨が降り続けている。

——ああ、このまま満ちて、沈んじまえばいいのに。

俺も、いとしい女も、このまま水の底に沈んで、そこでとわに暮らせたら。

こと切りたいとしい女の姿は、紅い血に染まり、まるでみずから飛び出し命を失った金魚のようだった。

fin

「……お、目え覚めたか、まだ早いからもうちっと寝てな」

薄っすらと開けた目に、まぶしい朝日を背にした恋びとの顔が映った。

そう、私の恋びとはいつだって私より早起きで、こうして見られたくない油断しまくった寝起き顔をためらいもなく覗き込む。審神者就任一周年の朝も、二日酔いでひどいことになっていた私の枕元に、獲れたてびちびちの鯛を驚づかみにして現れ、それで頬を叩かれ起こされたことは今でも忘れていない……もちろん、恨みの方でだ。

とにかく私の恋びとは、むくんだ素顔や、口の端に残るよだれの跡なんかを、容赦なく見られる女の絶望感などまるでお構いなしだし、そもそも思い至りもしない。

私の愛する男は、雅のわからん刀なのだ。

さて、今朝の彼はいつもに増して上機嫌である。

片や私は、もうこれ以上ないくらいの絶不調だ。それは仕方ない。何せ、昨晩は寝かせてもらえず、夜が明けた頃にようやくとうとうとまどろんだ程度なのだ。完全なる寝不足である。肌にも悪いことこの上ない。

それなのに、不調の元凶である目の前の男は、肌はつるつるでまるで陶器のようなのだから、神さまは不公平だ……あ、そういえばこいつは九十九神だった。とかく「神」と名のつく者は傲慢だ。こちらの都合などお構いなしだ。そして、愛情深く嫉妬深い。

「……ん」

いつまでもぼーっとしている私に、顔を近づけ彼がくちびるを合わせてきた。おはようの挨拶だ。やさしくふれ合い、そっと離れていった今日の恋びとのくちびるは——味噌汁の味がした。

「もしかして……今日のお味噌汁って」

そう訊ねれば、彼はうれしそうに笑った。

「ああ、今朝は大将の好きな赤だしだ、ちゃあんと好物のぶりの切り身も入れておいたぞ。自分で言うのもなんだが、なかなかの出来だ、楽しみにしていぜ」

得意げな笑顔を見ながら、ああしあわせだなあ……と思う。と同時に、胸のどこかがちくりと痛んだ。なにか……悲しいような、せつないような、うまく形容しがたい感情が川底の砂を蹴り上げたときのように、こころの中をゆっくりと漂い旋回している。

「うん？ どうした……浮かない顔して。今朝は赤だしって気分じゃなかったか」

ピントのずれた心配をしてくれることがとてもうれしく、またこそばゆくて、私は今度は自分から彼の頬へキスをすると、「……夢をみたの」とそっと口にしてみる。

「あ？ 夢？ どんな夢だ、まさかどこかの野郎と逢引き、なんてのじゃねえだろうな」

すっと目を細めて疑うように見てくるのが癪で、眼鏡を取ってやる。しかし、動じず平然として

いるのが憎らしい。大体、いつも思うのだけれど、これって度は入っているのか。

「うん……確かに出てきたよ、男のひと」

そう言ってやれば、「へえ……聞き捨てならねえな、もっと詳しく教えてくれるか」と、起き出したばかりなのに布団にまた転がされる。すぐさまのし掛かってくる行儀の悪いその瘦身を腕を伸ばして捕まえ、ぎゅうと抱きしめてやった。そのままの姿勢でつぶやく。

「出てきたのはね……みんな薬研だったの」

春の夜、咲き狂う桜の下で愛するものとの別れを見つめていた薬研。

もう一度あいたい、その願いを抱いて、ずっと愛する人を待ち続け、迎えに来た薬研。

いとしい人を自由にしたいと願い、共に逃げた先で喪った薬研。

それは、どこかの世界の、どこかの薬研の話。

けれど——それなのに、こんなにも胸がくるしい。こころが痛い。

「あのね、薬研……私、どこか遠いところにいる、知らない誰かの薬研藤四郎も、しあわせであるといいなって思う。どこにいても、どんな人のもとでも、誰を愛していても、すべての薬研藤四郎が、しあわせであって欲しいと思うの」

それは、薬研藤四郎を愛した人の子の切なる願い。

いつも、いつでも、私は、そして薬研藤四郎を愛した審神者は、願っているのだ。

どうか、薬研藤四郎がしあわせであるように、と、強く強く。

鼻の奥がツンと痛くなり、横を向く。

腕の中に閉じ込めた、いとしい私の薬研藤四郎は、神妙な顔で何かを考えている。

互いにしばらくそれぞれの物思いに耽った後、薬研がぼつりと言った。

「俺も——『俺たち』も、いつだって大将のしあわせをこころから願ってるぜ」

そして、私たちは束の間の微睡みに落ちていく。

今度こそ、しあわせな誰かの夢を見られるといいな、と祈りつつ。